

Case Study

支部ケース・スタディ

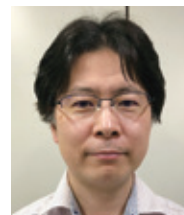
信越支部

台風19号で千曲川氾濫! 局舎浸水と災害報道の経緯

(株)テレビ飯山(iネット飯山)

取締役 放送部長

澤井 昭宏



昨年10月台風19号上陸で局舎1階が水没

昨年は全国的に台風災害に見舞われた年でした。まず初めに今回の台風災害に遭われ、お亡くなりになられた方へのご冥福と、被害に遭われた全国の皆様へお見舞いを申し上げます。

昨年10月に発生した台風19号は長野県にも甚大な被害をもたらしました。

台風19号は10月12日(土)の夜に長野県に上陸し、上流より徐々に千曲川が氾濫を始め、溢れた水が各地を襲いました。

当社は飯山市より委託を受け、施設や放送、通信の管理運営を行っている第3セクターの会社です。長野県の北部にあるケーブルテレビ局で、長野県では千曲川の下流に位置します。当社の目の前には千曲川が流れており、社外へ足を踏み出すと堤防がそびえ立ち、局舎の3階からは河川の様子も見られる場所ですので、普段から水害が発生した際の備えと心の準備はできていると思っております。

しかし、今回の台風は超大型。しかも長野県を通過したため、市内では630件が浸水被害を受けました。そして、自局も水害に遭うというまさに想定外の出来事が起こりました。

翌13日(日)の早朝4時過ぎに千曲川に流れ込む支流の堤防が決壊。中心市街地に水が流れ込み、住宅や商店、行政機関などが浸水。同時に中心市街地の機能も停止。初めてのことでした。

当社は3階建ての局舎ですが、当日は1階フロアに水が浸入し水没。水位は約120cm、腰の高さを超える水の量でした。幸いにも放送、通信設備や発電機、その他機材一式は2階以上に設置されているため局舎の機能を失うまでには至らず、放送は通常通りにOAできており、通信も電気もつながっている状況でしたし、伝送路も奇跡的に無事だったのは幸いでした。

しかし、1階には事務室があり、全て水没したため事務機能を失ってしまいました。片付けなどで仮復旧までは2日ほどの日数を必要としました。



局舎の浸水



地域の浸水

他局との連携、生中継、ドローン等で続けた災害報道

災害報道については10月12日(土)の夜17:00から開始しました。この時すでに伝送路・通信関係で1名が出社しており、その後、当方も出社し、通常の番組をすべてキャンセル。千曲川に設置されている河川カメラのLIVE映像に切り替えて放送を始めました。このカメラは国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所が設置しているLIVEカメラを自主放送にも転用できるようにしてあり、隣町の上流から自局エリアの下流まで7つのカメラを順番に切り替えながら放送しました。夜でも映し出された映像で水位がわかるため、危険を冒して河川まで撮影に行く必要がなく、安全にリアルタイムで視聴者に水位をお知らせすることができました。

インターネット上でも公開されていましたがアクセスが集中しダウンしてしまう現象が起きており、その点では専用線を持っているケーブルテレビの役割は大きいと思っています。

その後、23:30頃、隣村のケーブルテレビふう太ネット木島平様より避難所にテレビを引き込むとの情報をいただきました。飯山市民も避難していたので、それなら飯山のLIVE映像をふう太ネット木島平にも送り、同時に放送しましょうと話がまとまりました。

避難所にテレビの設置工事が終わり、13日の深夜1:45頃には映像を避難所へ送り届けることができました。もともと、長野県のケーブルテレビ局でネットワークが組まれており(長野県CATVネットワーク)、光でつながっているので、当局とふう太ネット木島平でこのネットワークを使い、両局の自主放送でLIVE映像を放送することができました。

しかし、3:30頃、上流の堤防が決壊したため、堤防沿いに埋設されていた千曲川河川事務所と当局の間の光回線が断線。すべての映像が途絶えLIVE配信はここで終了となってしまいました。

その後は、5:00頃、社員が様子を見に出社し、社屋の周りにゆっくりと水が迫ってくるのを発見。社有車や中継車が水没しないよう、4名で近所の高台や社員の自宅へ車の移動を開始。移動させている間にもどんどん水かさが増してきました(6:30で股下くらい)。事務用パソコンや書類の避難を開始。6:40過ぎに放送スタ

UP1名出社。カメラを2台用意し、3階にある北側の窓と西側にある窓から浸水した街の様子を7:25より生中継を開始しました。

8:00頃に1名が出社したところには水位は腰下にまで達し、机や椅子が浮遊していました。中継映像を放映しながら4名で1階事務所の書類などを移動させる作業を続け、昼に移動を終えた頃には腰上にまで水位が上昇していました。

13:00頃、小雨だったが、雨が止んだ瞬間を狙って用意していたドローンを稼働。すでに堤防が決壊している情報はつかんではいましたが、陸路では現場に近づけないため、千曲川の河川敷沿いにドローンを飛ばし決壊した支流の現場まで行ってみると、決壊している様子がはっきりと見られたので上空より撮影開始。合わせて市内が水没している様子を撮影し帰還。直後に雨が降ってきたので撮影はこのワンチャンスのみでした。撮影した映像はすぐに放送を開始。市内浸水の状況をいち早く知らせることができました。

13:30頃、消防隊がボートで取り残された住民を避難させていたので、カメラを持ってボートに乗り込み取材を開始。徒歩で街中を取材し17:00過ぎにボートで帰社。すぐに編集して街の様子を放送開始し、状況を伝えました。翌日からは生活情報を中心に、21日まで災害放送を続けました。

後日、上空からの映像はどこからどこまで浸水したかがわかり、大惨事であることを把握できたとのこと意見を多くいただきましたが、もう少し先まで見せてほしかったとのこと意見もいただきました。

自局が浸水したため社員は局舎に近づくことができず、残された人間が社内で避難をしながらの生中継でしたが、マンパワーが足りない中でどれだけ多くの情報が出せるか、課題も見つかり今後に備えたいと思いません。



河川カメラ生中継(左:立ヶ花/右:古牧橋)



放送画面